

## + 5 2 【あほうざか】

口をききはじめてから気づいたのですが、隣のお姉さんの〈坂〉好きはたいへんなもので、いずれは上坂とか坂下というひとと、結婚するにちがいないとおもわせるほどでした。

どうして坂が好きかときいても笑っているだけでしたから、本人にもよくわからないのかもしれない。

だれがいったか、人生には〈のぼり坂〉と〈くだり坂〉と〈まさか〉があるとのことですが、そうした喜怒哀楽（きどあいらく）の人生を想わせるところが好きなのもかもしれないし、坂によって風情がおおきく異なる、またその坂でも春夏秋冬によって有為転変（ういてんぺん）の味があって、そんなところが好きなのもかもしれないと、いまではおもいますが、あのころはぼくのおばけ好きとおなじで、生まれつきなものだとかんがえていました。

そこでぼくが真剣にかんがえたのは、隣のお姉さんが好きな坂と、ぼくが好きなおばけを合体させると、どうなるのだろう、ということでした。

ぼくは隣のお姉さんと一緒に、いつもその〈おばけざか〉をのぼりおりすることになるのかもしれない。

坂の途中でお姉さんが「怖い」なんて叫んでぼくにすがりついたり、「素敵（すてき）」なんて呟いてぼくになっついてきたり、そういうことまでも夢想しながら、懐爺のところへ行きました。

懐爺は眼を遠くへやって、

「日本の三大おばけ坂は、まずは麻布の暗闇坂【くらやみざか】。昼間でも真っ暗ですから、懐中電灯が必要なのですが、もって行ってもどういうわけかつかない。使えるはずのないものが使えないというのは、怖いものです。おそらく磁気（じき）みたいなものが、発生しているんでしょうね。つぎに、小石川の切支丹坂【きりしたんざか】。江戸時代に切支丹専用の牢があったところで、拷問（ごうもん）で死んだ切支丹の幽霊がでるとか。それと、たまに、踏絵（ふみえ）が、天から降って来て、

大怪我をするとか。踏絵の材料は、鉄、木、紙、たまに金。この金を目当てに、わざわざ行って、お亡くなりになるひとがいます。もうひとつは、神楽坂の幽霊坂【ゆうれいざか】。幽霊がでそうな、寂しい坂は、他にいくらでもありますが、なにせ周りはずごく賑やかなのに、坂だけが人通りがない。それで余計に、寂しさこのうえないというわけです」

「むむむ、みりよくてきな、さかだのう。むむむ、だども、あざぶも、こいしかわも、かぐらざかも、いけんのう。だば、このむらの、さんだいおぼけざかで、がまんするかのう」

「それなら、金ちゃんもきいたことがあるはずだし、のぼりおりしたこともあるはずです。はい、狐狸坂【こりざか】地獄坂【じごくざか】阿呆坂【あほうざか】ですね」

「【こりざか】は、しっとる。きつねやたぬきがすんどるさかじゃろ。つまらんさかじゃ。あそこのきつねやたぬきは、ばけんからのう。【じごくざか】も、しっとる。あれは、しんのぞうがわるいひとは、のぼっちゃいけないじゃ。むらのじいさんばあさん、だいぶしんどるな。ただ、きゅうなだけの、つまらんさかじゃ。だども、わしは、【あほうざか】たあ、はじめてきくのう」

「【あほうざか】は、いわば伝統のない坂ですからね。戦時中、中山が要塞（ようさい）と間違えられて、空襲（くうしゅう）でやられたときに、燃えて禿げた所が坂になっただけですから」

「ほう、あのさかかい。そんならしっとる。こやまのてっぺんから、ようみえるでのう」

というわけで、次の日曜日の午後に、坂好きの隣のお姉さんを誘って行きました。

途中、隣のお姉さんは、歌のお姉さんになりました。

の一ぼりざか く一だりざか ま一さかまさか  
しのぶしのばず しのぶざか あすはあるのか あしたざか  
の一ぼりざか く一だりざか ま一さかまさか  
おしどりなくよ めおとざか えんはあるのか むえんざか  
の一ぼりざか く一だりざか ま一さかまさか

ごんごんごと むごんざか ほんほんほんと むほんざか  
の一ぼりざか くーだりざか まーさかまさか  
がんもうれしや がんぎざか ねこもたのしや ねずみざか  
二時間ばかり歩いて、【あほうざか】に着くと、隣のお姉さんは、  
「素敵、素敵」

と何度も眩きましたが、ぼくになっついてくる気配はありませんでした。

ただの殺風景（さっふうけい）な坂の、どこが素敵なのか、さっぱりわからないぼくは、

「うまいのう、うまいのう」

といいながら、隣のお姉さんがもってきてくれた、おにぎりを頬張っていました。

すると、夕方にはまだすこしあるのに、坂の上空を鳥が飛んでゆきま

す。あほう、あほう、と鳴いて飛んでゆきます。

（なんじゃ、それで【あほうざか】かい。つまらんさかじゃ。どこがおばけざかじゃ）

ぼくは呆れましたが、きれいな眼で鳥をみあげている、隣のお姉さんにはいいませんでした。